HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光と近代 ： 英国を例にとって
Author(s)	西川, 克之
Relation	北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 「観光創造学を考える」研究会録. 2013年11月23日, 24日. 北海道大学遠友学舎.
Citation	「観光創造学を考える」研究会録 / 北海道大学観光学高等研究センター共同研究会「観光創造研究会」設立準備会, 94-109
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56564
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	conference paper
File Information	08_1nishikawa.pdf, 発表

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

◆研究発表８

観光と近代～英国を例にとって

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院
西川克之

前近代の時間，近代の時間

私の研究者としての出発点はイギリスのロマン主義文学なのですが，先ほど清水先生が物語は境界線を超えたところに始まると仰っていましたが，ロマン主義文学もそのような性格が強くて，いくつかの詩作品において主人公や語り手は，まず現実世界から離れて想像的なあるいは超自然的な世界に入り込んでいき，日常と異なるそこでの幻想的な体験を経て再び現実世界に戻ってくる，そういう軌跡を描くのが典型的なパターンとしてあります。例えばコールリッジの「老水夫行」という詩などは，若かったころの語り手が遠洋へ航海に出掛けて，気まぐれでアホウドリを石弓で射殺してしまう。そこから苦難の旅が始まって，べたなぎの日照りが続く中で仲間の船員が次々と倒れていき，ついには「死中の生」を目の当たりにするといった超自然的な体験を経て，故郷の港町という現実世界に帰ってくるという軌跡を描く。それを考えると，観光研究と遠からずのことをやっていたのかなとも思うのですが，いずれにせよ私が観光研究に取り組み始めたのは 7 年前に観光創造専攻に関わるようになってからのことであります。

今日お話しすることは，昨日の論者のみなさんがお話しされたような観光研究の実際的な貢献の可能性ということからかけ離れた概念的な議論に終始してしまうかもしれませんし，西山先生がお話しされた観光創造学マップ上で私の研究がどこに位置付けられるのか非常に心もとないところがあります。ひょっとすると，観光創造研究の主流に対するちょっとしたノイズとして響くのかなとも思います。ただ，ピュアな音のみから構成された和音は必ずしも人の心に訴えるように響かないこともあるのではないかという心意気で，今日はお話しさせていただきたいと思います。

タイトルは「観光と近代」，これは以前にお示ししたとおりなのですが，今日は「disembedding から(re)embedding へ」という副題を加えさせていただきます。disembedding というのはイギリスの社会学者ギデンズの理念を借りたものです。本日の私の趣旨は，近代がもっぱら disembedding の方向に進んできたのだとすれば，観光を通して(re)embedding の可能性を探ることができないかということであります。(re)embedding の括弧の意味については後で触れたいと思います。

さて，先ほどの清水先生のお話は旅を普遍的なものとして捉える立場を採られていましたけれど，私の場合は，観光，あるいは tourism という英語を用いた方が正確かもしれませんが，これは極めて近代的な事象であるという前提に立ってお話ししたいと思います。たとえば，ジョン・アーリは「観光客であるということは，近代的であるということの決定的な特徴の 1 つである」と述べていますが，私もそれに倣って，観光を考えることを通して近代とは何かを考えてみたい，あるいは，観光というものに内在する近代性を振り返って，今度は逆に観光創造の可能性を照射できればなと考えております。副題に示した disembedding についてですが，先ほども申し上げたように，これはアンソニー・ギデンズの『近代とはいかなる時代か』という本の中で展開されている議論です。ギデンズはまず，近代の特質は時間と空間の分離 separation of time and space にこそあると言います。すなわち，近代以前の社会においては

> 大多数の人びとにとって，日々の生活の基盤をなす時間の測定は，つねに時間を場所に結び

つけるかたちでおこなわれていた[…]他の社会空間的標識にまったく言及せずに，誰も一日の時間の経過を口にすることはできなかった。(ギデンズ 1993)

とされます。時間の意識は何かの場所あるいはそこでの関係性に言及しないでは成立し得なかったということです。つまり，近代以前の社会においては，時間というものは決してそれ自体で計測されて，1 時間，2 時間といった単位で測られるものではなくて，他者との関係，あるいは環境との関わりにおいて経験され，どこで何をしていたのかというストーリーとともに，切れ目なく続いて流れていくものとして認識されていたということでしょう。すなわち，時間は有益であろうがなかろうが，それが流れていく環境としての場所や具体的な他者との関係を抜きにして理念化されることのない，常に何らかの物語を伴ったものとしてあったはずです。こうして，場所や関係や物語の要素で満たされていない空白の時間がイメージされることは近代以前にはなかったでしょうし，また，ある量の労働時間とある長さの余暇時間としてあらかじめ切り分けられたものでもなかったはずです。たとえばマイケル・マラスは，近代以前の社会における労働とそれ以外の時間のあり方について，聖月曜日のように本来休みではないのに勝手に休んでしまうことに加えて，さまざまな非労働時間の活動がもちろんあったけれども，それは労働と截然と分節されることなく 1 日の生活のなかに組み込まれていたのだと述べています。こうした活動はまた同時に，伝統的な共同社会における特定の文脈の中に組み込まれて初めて意味を為すものでもありました。

聖月曜日(労働者の中には週の初めを勝手に休日と決めて飲んで過ごすものもいた)に加えて，さまざまな非労働的活動―歌ったり，飲んだり，踊ったり，うわさ話したり―が一日の労働に当たり前のように含まれていた[…]こうした活動は伝統的な共同社会の生活の一部であり，それ以外では意味をなさなかった[…]伝統的な社会はキリスト教的であり，田舎風であり，ヒエラルキー的であり，慣習によって支配されていた。(Marrus 1974)

ディ・グレイジアという研究者も似たようなことを言っています。近代以前の社会の靴屋を例にとって，彼には決まった労働時間があったわけではなく，仕事をしながらも手を休めたり，飲み屋で噂話に花を咲かせたりといったふうに時間が流れて行ったのだと。

靴屋は好きな時に起きて好きな時に働き始めた。何か面白そうなことが起これば，作業の手を休めて見に出かけた。飲み屋でうわさ話に花を咲かせるのに時間を費やし過ぎた日があれば，翌日は夜中まで頑張って遅れを取り戻した[…]靴屋には作ったり修理したりすべき靴があった。飲み屋でカードをしているときは靴を作っていなかったが，いずれにせよ彼は「自由な時間」を過ごしてはいなかった。近代的な意味での時間に従って生きてはいなかった。彼には作るべき靴があり，飲むべきビールがあり，遊ぶべきカードがあったが，そのどれをも彼は「労働と余暇」という言葉を必要とせず行っていた。(de Grazia 1962)

こうして靴を直すという仕事が時間単位で区切られるということはなく，当時の靴屋は現代に生きる我々が常識としているような意味での時間に従って生きてはいなかったというふうにディ・グレイジア述べています。伝統的な共同体では，たとえ働いていない時間であっても，場所や他者との関係性に束縛されていたわけあり，その意味において共同体での生活に時間が埋め込まれていたといえるでしょう。生産とか奉仕に費やされる以外の時間であっても，個人の裁量に委ねられた自由な時間とは捉えられていなかったはずです。そ

れが，やがて社会が近代化され，労働が規律化され，また時間が単位当たりで計測されるようになると，時間はもはや切れ目なく流れていくものではなくて，一定の長さをもった労働時間と自由時間に線引きされていくようになります。

> それに対して，[工場で]10 時間労働に従事する労働者が手にしたのが「自由時間」，すなわち，以前は手にしたことがなかった「無為の集中」であった。労働時間と自由時間はこうして分けられ，それが現代まで続くことになった。（de Grazia 1962）

こうした時間の分節化と，具体的な場所や社会関係からの解放を可能にしたのは，クロック・タイムが制度化されていくことであるとギデンズは述べます。

> 機械で動く時計の発明と，事実上すべての人びとへの機械時計の普及は，時間の空間からの分離にとって重要な意味をもつ出来事であった。時計は，「空白な」時間という均一の次元を表示し，その結果[…]時間を定量化していった。（ギデンズ 1993）

空白な空間 empty space の成立と脱埋め込み disembedding

さて時間が具体的な場所から離れ，時計の文字盤になぞらえて定量化された，空白な帯としてあたかも物理的に認識されるようになったのと同時に，空間と場所の分離というものが，近代を特徴づけるまた別の事態として現れてきます。ここで言う空間というのは space であり，場所は place です。空白な空間 empty space というものが，具体的な行為とか関係を具えた場所から遊離しはじめるとギデンズは述べます。近代以前であれば，場所と空間は一致していたはずであり，具体的な社会的活動が生起する場所と，理念的なイメージとしての空間は，ほぼ同義であったと捉えられます。つまり，日常の生活で移動する範囲が，頭の中でイメージされ意識化される空間の範囲とほぼ重なっていたことになるでしょう。ところが近代化が進んでいくと，実際の生活の領域をはるかに超えて，いわば認識対象としての空間がどんどん極大化していくということになります。つまり，近代化が始まると，位置的に遠いところにあり実際には顔を合わせたことのない不在の他者 absent-others との関係が，今この現場で我々が顔を付き合わせているような対面的相互関係の環境とは異なる空間の中でどんどん促進されていく。多くの人にとっては依然として目の前の存在との関係が支配的であるように見え，不在の他者との関係は把握しにくいままであるにも関わらず，その影響が現実の生活圏に徐々に及び始めていきます。こうして，空間は場所から切り裂かれ，具体的な関係で隙間なく満たされていたはずの地域的な場所 locale に，遠く離れたところとの諸関係が影響を与え始める。遠く離れたほかの地域や場所が発見されその情報がもたらされることによって，個々の地域的場所は相対化され，それぞれが空間的単位として置き換え可能になっていくと言います。私を社会的諸関係に縛りつけている「ここ」は，私にとって唯一絶対の場所なのではなく，いわば「そこ」や「あそこ」と同質であり，等価の空間なのかもしれないという意識を人は持ち始めることになります。ヨーロッパにおいては 16 世紀以降探検家，冒険家が他の大陸に出掛け，そこで得た情報をもとにしていわば平板化・抽象化されたかたちで世界地図がつくられていくことによってこうした状況は促進されます。つまり，その世界地図の上では，特定の場所とか地域の社会関係や物語が脱色されたような空間イメージが成立していくことになります。かつてのどこか高いところから俯瞰されたような実体感あるリアルな場所の感覚が一方にあるとすれば，たとえば地勢図とか土地利用図といったような情報に還元される，いわばバーチャルな場所のイメージが近代以降重ねられていくことになるでしょうか。

さて，このような時間の空間からの分離，さらに空間の場所からの切り離しを背景として，脱埋込み disembedding が生じてくるとギデンズは言います。

> 脱埋め込みという言葉で私が言いたいのは，場所性を有した相互関係のコンテクストから社会関係が「遊離すること」，時空間の非定型的な広がりを貫いてそれが再構造化されることである。By disembedding I mean the "lifting out" of social relations from local contexts of interaction and their restructuring across indefinite spans of time-space.（ギデンズ 1993）

この disembedding という言葉で示されているのは，我々が目の前にいない他者とであっても，時計の目盛で刻まれた時間を共有し場所から切り離された空間に共在することで相互に関係し合うようになることでしょう。卑近な例でいうと，センター試験において相互に出会ったこともない数十万の受験生が，同じ時間にそして同じようにイメージ化された空間で競争を余儀なくされる状況を挙げられるでしょうか。ある種，このような受験生の総体も，1 つの「想像の共同体」であると言えるかもしれません。また，具体的な場所と結び付いて成り立っていた労働は，切り取られ計量化された時間と，たとえば工場のように規格化された空間の中に再編成されたひとつの作業に転化することになるでしょう。そしてこの近代的な時間と空間の中に再編された事象の 1 つの典型例が時刻表であるとギデンズは言います。つまり，時計で刻まれた時間に合わせて，それぞれの場所，空間において特定の決まった出来事が起こっていくことが 1 つの表に書き込まれている。考えてみれば私たちはこのような時刻表を頼りに，さらにまた具体的な場所性が書き込まれることのない地図，そこに埋め込まれているはずの関係性が捨象された地図を手に，均質化された時空間を貫くシステム，たとえば国際的ホテルチェーンなどの旅行に関する諸サービスやトラベラーズチェックといったような，均質化された時空間を貫いているシステムを信頼して，近代的な観光に出かけるようになったといっていいかもしれません。こうして昨日の敷田先生のお話にもあったように，人やモノの移動は時空間の再編によって急激に膨張し，近代的観光は脱埋め込みによって加速度的に拡大してきたはずであります。またこうした脱埋め込みというものはいわゆるグローバル化した社会状況を生み出す 1 つの社会的契機でもあったはずであります。

公共圏の成立と「観光のまなざし」

こうして，近代化の特徴の 1 つとして脱埋め込みというものが考えられるわけですが，次にもう 1 つ，観光と関わる近代の特徴の 1 つとして，ハーバマスに依拠したものですが，商品化した文化が市場で流通し趣味や価値判断が社会的に共有されるようになっていくプロセスについて概観してみたいと思います。この舞台になるのが 18 世紀以降のヨーロッパの近代化した市民社会であるわけですが，先ほど申し上げた言い方を重ねれば disembedding によって場所の束縛から解放され，平準化された時間の尺度が採用された無限定に拡大する空間において展開をする市場を背景として，自由で平等な立場での交換によって資本を蓄積していく市民が主役として登場してくることになります。彼らはやがて，公共的な言論空間，外に開かれた対等な立場で議論を交わすような言論空間，ハーバマスはこれを市民的公共圏 bourgeois public sphere と言いますけども，それを形成する。そうした活動の現場になるのがリアルな空間ではコーヒーハウス，バーチャルな空間では定期刊行物，いわゆる雑誌になるわけです。その例として *Spectator* という 18 世紀のはじめ頃にイギリスで刊行された雑誌について簡単に触れてみたいと思います。spectator という言葉は観察者という意味であり，つまりこの雑誌のタイトルは一市民が観

察者となってロンドンの文化や流行・風俗についてコメントを述べるということを含意するわけですが，それは社会批評のはしりであると同時に，そのような観察を共有し合う空間が成立していったことをも示します。こうして芸術や文化あるいは道徳に関する公衆の議論を通して，いわば普遍的な判断基準とか価値基準が形成されることになります。たとえば，1711 年にこういう文章が書かれています。

> 豊かさ(riches)が作法(manners)に与える影響以上に普遍的なものがあるだろうか？[…]あらゆる階層の人びとが[…]服装, 調度品, 家, 家具, 娯楽などにおいて特徴を打ち出したいと強く願っている。[…] [中流層の家庭では]その食卓は，100 年前の大貿易商のそれと同じような食事が並び，住居も立派で装飾がほどこされ，家具は前の時代から見違えるほど改善した。服装の点では，飾り小物でめかし込んだ若い男女を見ればよい。(Berg 2007 に引用)

この時代にはガラス製品とか金属製のバックルやさまざまな装飾品が普及し，中流家庭の室内は調度品とか絵画で飾られていくようになりますが，そのような慣習が共有されるべき文化として社会一般に広がっていくことになります。そして，そのような教養を備えた立派な市民の間に共有される趣味の 1 つとして，18 世紀終わりころに行われたピクチャレスク・ツアーを挙げることができるでしょう。ウィリアム・ギルピンが書いた『ワイ川および南ウェールズの地域に関する観察：主にピクチャレスク的美の関連から』という本を契機に，実際にこのワイ川を下るツアーが，と言いましてもトマス・クックによるパッケージツアーとは様相が大きく異なりますけども，いずれにせよある程度制度化されたツアーが始まっていくわけです。このツアーでちょっと面白いのは，クロード・ロランやサルバトール・ロサ等の絵画に描かれているような風景を探してツアーに出掛けるということです。その時に持っている小道具がクロード・グラスいうものなのですが，その言いはクロード・ロランの描いたような色合いで風景を見せてくれることにあります。つまり，旅行者はこれを持っていって鏡に写して風景を見る。つまり風景に背を向けて鏡を覗くとクロード・ロランの絵にあったような風景に出会えるという仕儀となります。こうして見るとピクチャレスク・ツアーは「観光のまなざし」のはしり，イメージ先行の観光，観光の大衆化に端緒を開いたものであるとも考えられますが，このピクチャレスク的な理念について，とある研究者はこう言っています。

> イギリスのありきたりな自然風景に美を与えることによって，ピクチャレスクの理念は多数の国民に美的判断というものは特権的な少数の才能なのではなく，誰にでも身につけることができて，ほとんど何にでも適用できるのだという認識を与えたのだった。ピクチャレスク理念の最も重要で確固たる影響は，中流の人びとに生活を美的に見る態度を促したことだ。というのも，ピクチャレスク理念は，人びとに自然を一枚の絵画であるかのように見ることを教えて，特別な景観や絵画に対してだけでなく，慣れ親しんだ場面や物―都市景観，建築物，庭園，動物，家具，陶器，織物，ドレス―に対しても向けるよう訓練された目利きの視線を習慣づけたのだから。(Birmingham 2010)

こうして趣味判断能力というものが，当時の社会においてドミナントな階層として台頭しつつあった中流一般市民の間に文化的素養として共有されるようになっていきます。

re-embedded な記憶や物語としての観光の可能性

さて最後に若干の考察に入りたいのですが，脱埋め込みとか価値の社会的共有がもたらしたものは，伝統的な共同体の束縛から人を解放しつつ，

効率的な生産や迅速な情報とモノの流通を可能とするように時間と空間を再構成 restructure する，あるいは人を再配置 relocate する，特に田舎から都会へ労働力を移動させるというかたちでの社会の近代化の推進であります。もちろんそのような近代のシステムが浸透することによって，たとえば私のような人間でも公共圏という言論空間の一隅に身を置いて，今日こうやってお話しできるような文化とかある種の教養というものを身につけることができるようになったでしょうし，何よりもまず社会全体が豊かになり，そしてたとえば多くの人が観光に出掛けることができるようになっていった。しかし一方でまた，そのような脱埋め込みというものは，具体的な土地とか場所に根ざした安定した社会関係から人を切り離し，さらなる効率を求めてたえず再構成され続けなければならないような流動化した時空間に身を委ねざるを得ない状況を意味するわけでもあります。これが近代の宿命であるとすれば，観光もそのような状況と切っても切れない関係にあるでしょうし，効率性や流動性の追求が昂進していくと，時としてたとえばラスキン，シベルブシュ，ブーアスティンらによって観光はまがい物であると批判されることになります。

このような disembedding に始まった近代的な観光の制度化，あるいはその浸透というものを逆に照射して考えてみると，観光創造の可能性の 1 つが見えてくるかもしれません。ここで言う観光とはもとより近代的ツーリズム tourism としての観光ではありません。むしろ観光創造が指向するような，観光を契機として土地や場所と実体的にかかわり，それに根差して生きられた社会関係を経験し，計測化され計量化されるのではない，途切れなく継続していく時間に身を置くこと，あるいはそのような経験や時間を通して，authentic な，つまり本日副題に掲げた言い方で申しますと re-embedded な，ただし現代においては disembedding の状況が常態化しあるいはそれ避けがたく宿命づけられているのだとすれば常にカッコ付きの(re)embedded であるかもしれないですが，いずれにせよ re-embedded された記憶や物語を刻み込み，あるいは昨日のお話で石森先生が用いたイメージをお借りすれば他者の関係とか場所にハグされたような感覚を残してくれる，そうした観光の可能性が見えてくるように思えます。いずれにせよ，こうした観光を通して，グローバル化した社会においてますます透徹してくるような近代性，それを揺るがすある種のノイズ，いい意味でのノイズとして観光創造は可能性をもっているのではないかという風に考えています。

【コメント・質疑応答】

コメンテーター1：真板

すごく面白かったのですが，しばし理解に，もうちょっと自分自身の知識をつけないと理解しきれないところもあったのですが，僕，先生が最後に，ひっくり返して，観光創造の可能性を逆説的に言うと，このように観光創造の可能性があるのではないかと，先生はお話しになりましたけど，僕も，先生の話を聞きながら，これは，今僕らが進めているエコ・ツーリズム，着地型観光とどういう関係があるんだろうか，あるいはどういうふうに見えるんだろうかと，ずっと頭の中でぐるぐる考えていたんですが，1 つはですね，前から日本で思っていることがあって，それは，今，僕はよく着地型観光といって，地域が主体だと考えますよね。その中で最近一番問題になっているのが，どこでもそば体験なんですよね。どこでも同じようなことをするんです。でもそれは，体験型ツアープログラムであることは間違いないですね。ところが，着地型観光の中で，地域が提供する体験型プログラムの社会的意義が必要です。どういう理念に基づいて，どんなプログラムを提供するかという，理念とか，基準，考え方が曖昧だったんですね。僕もそれは悩んでいまして，地元の人たちが体験してきたものを，要するに誇りと思えば出せばいいと，そういう抽象的な言い方をしてい

たのですが，それを言えば言うほど，みんなそば体験，きこり体験です。すごくショックだったんです。でも今日のお話を聞いたときに，まさに，時間と空間に切り離されて，1 つの与えられた価値を，逆に自分で勝手に作って，地域の中に無理矢理求めて押しかけて入っていき，写真を撮って帰っていく。この様な地域の空間の歴史性や時間を無視した行為に対して，土地や場所と実態的にむしろ関わると，それに根差して生きられる社会関係，まさに地域の人，僕からすれば，語りとか，その人たちが現在まで生きてきた 1 つの歴史とか，そういうものを追経験することによって，自分を見直す事が出来るようになる。すなわち，計量化され切り離された日常生活に対して，途切れなく継続していく時間に身を置くことによって，自分の心をリフレッシュし，自分が置かれている場所を客観的にもう一度見ることができるようになる。すなわち，そこに人の愛を感じることができて，石森先生のようにハグしたくなると。そういう部分を，まったく最後のところを読んで，曖昧模糊としていた部分を，着地型プログラムに対する社会的意義というものに対して，非常に明確になったので，申し訳ありませんが，使わせていただきます。ありがとうございました。

コメンテーター2：平

お話ありがとうございました。近代では「時間が切り離され，空間が拡大していった」とのこと，そして観光創造の可能性はその「逆照射」にあるという先生のご指摘に対して，現在の私たちの生活の中で「時間の切り離し，空間の拡大」の反対側にあるような過ごし方は存在しているのかと考えていました。私は茶道をやっているのですが，茶道はまさしくそれに当てはまるように思えます。茶室がある空間に咲いている花を生け，亭主がその土地や季節を表すような道具を揃えて，客と対峙して語る。まさしく場所の限定性がそこには存在しています。一方で，もちろん茶室には時計は置きませんし，太陽の光が差し込む窓も小さいところが多いので，時間を正確に把握することはありません。そこには絶えず流れる無限の時間が存在するようなものです。そう考えると，お茶という文化は，西川先生がおっしゃっていた「途切れなく継続していく時間」であったり「実態的な土地と場所」に通じるものがあるのではないでしょうか。そして茶道は私たちが昔から実践し，一応今日まで続いてきた文化ですから，観光創造を考える上で私たちにはそういうことをできる素地があるのではないかと思いました。

回答：西川

まず，真板先生ありがとうございます。私が本日こんなお話をした 1 つのきっかけは，実は西山先生と竹富島にご一緒したりとか，あるいは，先日白川郷にも同行させていただいたり，観光学高等研究センターと連携している美瑛町に行ったりとかして，本当に本日最後にお示ししたような感覚を与えられたことにあります。特に竹富島の時間の流れ方は環境とともにゆったりと進んでいく，それで，自然と顔がほころんできてしまうんです。体から，いろいろなものが抜け落ちて，芯まで軟らかくなってしまうような。美瑛に行ったら美瑛に行ったで，あの景観の美しさが，やはり農業という土地との密接な関わりの中から出来ている。これは，2 月の公開講座の時にも申し上げましたが，美瑛町出身の学生が，確かに美瑛町は観光客にとっては丘のまちだけれど，私からすると谷のまちなんですと言うんですね。そうだったのかと。あの景観は実は，農業をする人たちにとっては本当に生活の，営々と築き上げてきた生活の場所であり，そういう事実を踏まえた上で観光客は景観の美しさをおすそ分けしてもらうんだろうと。僕らが失ってしまったかもしれない豊かな時間や関係性，土地との結びつきをおすそ分けさせてもらう。僕らは disembed され続けているのかもしれない，グローバル化の波に洗われているのかもしれないけれど，カッコ付きで地域や土地の中に（再）埋め込み的な体験をさせてもらった気がし

たことが本日のお話のきっかけになっております。

平さんのおっしゃったことは，まさにそんな感じがします。僕は，茶道については何も知らない無粋な人間ですが，おそらく，知っているだけのことで言うと，千利休は余計なものを削ぎ落として，核になっているものだけを残して，そこで流れている時間と，他者との関係，その狭い空間の中での他者との関係に預けるということだったのかなと，今のお話を伺って感じました。

コメント：小林（英）

すごく面白いお話をありがとうございました。先ほどの清水先生のお話とも繋がるところが多いと感じましたが，時刻表を事例に取られるのは，非常にわかりやすかったです。要は予定調和の中に，本当の旅の面白さはないのではないかと，改めて感じました。先ほどの清水先生の話にもつながりますが，我々は決められた時間というものを正しいと思い込んでいますが，人の感覚によって時間の流れは違うわけですから，私なりの勝手な解釈をすると，やっぱりスケジュール旅行から自分の感覚時間を楽しむ旅に戻ろうと，そういう話に繋がるのかなと思いました。旅行会社は，予定調和ということを重視したツアー商品を作ってきた，私も 30 数年やってきましたが，そこではいろんなものを削ぎ落としてしまって，一番大事な意味まで削ぎ落としたのかなと感じます。つまり，偶然起こることが一番面白いことなのに，偶然起こることを避けてしまって，偶然起こる楽しさを楽しむというチャンスまで取ってしまった。それが，先ほどの時刻表に非常に現れていて，観念的に時間と場所を捉えてしまったことに問題があるなと。これは先ほどの清水先生のお話にも関わりますが，見ることに重きを置きすぎた近代観光の反省になるのではないかと思います。つまり，時の流れというのは一定ではなくて，本来そういうものをもっと楽しむのが観光であったはずなのに，見るという瞬間の意味にしか問わなくなってしまったところがある。そこに人間性や場所性までをも，排除してしまったということがあるのかなと思って，お二人の話を非常に，面白く聞きました。特に，清水先生のお話では，自己変容というのがキーワードかなと思っていて，自己変容を起こすことが 1 つの大きな目的だとすれば，自己変容はどうして起こせるのかということは，西川先生のお話をもとにすれば，予定調和の中では自己変容は起こらないということだし，清水先生に倣えばそれがどういう仕掛けの中にあるのか，茂木健一郎さんの本など読んでいると，脳は 0.2 秒で変わると。シナプスが，繋ぎを変えることで人間は変わるんだと。実はその体験というのは，時間の長さではなくて，自分が深い気づきを起こすとき，それが 0.2 秒だと。そうすると，時間というのは長ければいいということではなく，時間の質を考えるべきなんだということを含めて，お二人のお話は非常に面白かったです。ありがとうございました。

コメント：西山

最初に清水先生のお話を伺ったとき，一瞬ちょっと難しいという印象があったかもしれません。しかしこうして連続して，理論系の先生方のいろいろな解釈や他の研究に対する理解というものを述べていただいて，どんどん話がわかってくるようになりました。竹富島の話も頂きましたが，私などは，逆に何も考えずにがむしゃらにただやってきただけですが，それを後でこのように意味づけしていただくというような関係がもし，もっと建設的に，創造的に進んでいけば，こんな幸せな環境で研究できることはないと感じました。どうもありがとうございました。

【引用文献】

Berg, Maxine
2007 *Luxury and Pleasure in Eighteenth-Century Britain,* London: Oxford University Press.

Bermingham, Ann
2010 The Picturesque and Ready-to-Wear Femininity. In S. Copley and P. Garside (eds.) *The Politics of the Picturesque,* London: Cambridge University Press.
de Grazia, Sebastian
1962 *Of Time, Work, and Leisure,* New York: Kraus International Publications.
ギデンズ，A.
1993 『近代とはいかなる時代か―モダニティの帰結―』松尾精文・小幡正敏訳，東京：而立書房。
Marrus, Michael R.
1974 *The Emergence of Leisure,* London: Joanna Cotler Books.